

# 誌上舞台

木津川の治水を行った侠客

## 木津の勘助

案内人  
旭堂南左衛門

木津の勘助と申しますのは、本名は中村勘助というお侍。天正十四年(一五八六)、相模国足柄山に生まれ、江戸の初めに上方へやって参りまして、木津川の治水や周辺の開発を行いましたので、このような名前では呼ばれております。

講談では、勘助の男ぶりに豪商淀屋が惚れて娘を嫁にやる、その持参金三千両ほどを使う「大坂夏・冬の陣」で亡くなった人々を葬ってやったということになっております。数千人もの死骸が大雨でも降ったりしましたら木津川へ流れてくる、それを拾い上げて中洲に埋めておるうちに新田に相成り、上勘助、中勘助、下勘助という鳥ができたんやそうでございます。



「ほんまかいな」と首をかきつけている御仁、講釈師見て来たような嘘を言、とは申しますが、古地図では大正区三軒家周辺は「勘助島」と記され、浪速区敷津西は旧名を「勘助町」と申すのでございま

### 講談

釈台と呼ばれる小さな机を張り扇でバンバン、小拍子でカンカンと叩いて調子を取りながら、歴史にちなんだ物語を読み上げる話芸。

す。私、難波周辺を歩いていたおり「勘助橋」の碑、「勘助町」と書かれた町内会の古い看板、勘助を屋号にした店を見つけて嬉しなった覚えがあります。大国主神社には袴に陣羽織、二本差しの刀の柄に左手を置き、右手には木津川開発の設計図を握った凛々しい勘助像も立っておりますし、豪商の嫁がおつたかどうかはさておき、勘助は実在の人物でございます。



「今で言うデベロッパードエンジニアやな」って、それで終わりではございませぬ。寛永十六年(一六三九)の飢饉では、この勘助、幕府の米蔵を破つて多くの人命を救った義人なんぞでございます。しかしこれは天下の大罪。本人も元より打ち首・磔は覚悟の上でございまして「あつぱれな男よ」と特別な計らいを得て、勘助島へ流罪ということになりました。自分で作つた島に流すやなんてお奉行様も粋なことをなさいますなあ。町のために私財を投げ出し、我が身までくれてやろうという俠気(わいぎ)。忘れたらあかん、浪速の恩人(おんじん)でございます。



木津勘助翁像(大国主神社内)  
地下鉄 御堂筋線・四ツ橋線「大國町」下車すぐ

### 物語のあらすじ

#### 講談「木津の勘助」

貧しい百姓の勘助は淀屋の主人の忘れ物を拾い、店へ届けます。淀屋がお礼に10両を差し出すと突き返し、相手の無礼をなじります。奉公人は怒りますが淀屋は素直に頭を下げ、勘助は淀屋の度量を見直します。淀屋も勘助の気っ風のよさに感心し、翌日あらためて勘助宅へ礼を述べに行きます。これが縁となつて、勘助は淀屋の娘、お直を嫁にもらうことに。

前半は天下の豪商をものともせず正論をはく勘助の小気味よさ、後半はケタ違いの金銭感覚を持つお直が貧乏所帯に嫁ぐというおかしさが聞きどころ。『難波戦記』のような続きものではなく、一席読み切り講談です。

### 講談師

#### 旭堂南左衛門



兵庫県三田市出身。昭和51年三代目旭堂南左衛門の弟子となり南学の名をもらう。昭和62年真打昇進、南左衛門を創名。平成3年咲くやこの花賞、平成5年東京国立演芸場花形演芸会金賞受賞。平成17年上方講談協会会長に就任。平成12年に日本テレマン協会主催の「ヘンデル・オラトリオ」に内容解説の講談師として出演し好評を博したのがきっかけとなり、作家・中野順哉と二人三脚で「上方講談」の創作活動を積極的に展開。

#### 講談を聴きに行きませんか

##### ● 糸びす座講談会

毎月下旬 18時30分～ 1500円  
会場／道頓堀極楽商店街 6階  
交通／各線「なんば」難波下車  
☎06-6213-4020(糸びす座)

##### ● 上方講談を聞く会

毎月いずれかの木曜日 18時45分～ 1000円  
会場／ワッハ上方 4階  
交通／各線「なんば」難波下車  
☎06-6631-0884(ワッハ上方)

##### ● 天満講談席

毎月いずれかの火曜日 18時30分～ 1000円  
会場／北区民センター会議室  
交通／JR「天満」、地下鉄「扇町」下車  
☎06-6315-1500(区民センター)